前橋西高等学校　校長室だより
令和２年９月１１日
第２２号

「グループシンク」について

９月１１日です。１９年前の２００１年には、アメリカ合衆国で同時多発テロ事件が起きています。そのアメリカでは今、大統領選挙に向けた選挙戦が熱を帯びてきているようです。二大政党制ですから、事実上は、共和党か民主党のいずれかを選択するという構図です。

選挙戦では、社会の「分断」がキーワードの一つになっているようですが、報道で知る限り、両党が歩み寄りを見せながら政策等の議論を重ね、よりよい方向を目指すということにはなっていないようです。水と油とまではいわないまでも、双方による非難の応酬という場面もあるようです。相手側よりも多くの票を得なければならない選挙戦ですから、やむを得ないのかもしれませんが、「united」states のアメリカで、社会の「divided」が進んでいるというのも皮肉な感じです。ただ、分断が懸念されているのはアメリカに限った話ではありません。

それぞれの党を支持している人々はお互いをどのように見ているのでしょうか？　自分たちの考えが正しいと強く信じていると、相手の主張に耳を傾けるということは難しくなります。一方、同じような考えを持つ人々が議論をすると、議論をした後ではその考えが前よりも極端化したり、その考えに対する支持が強固なものになるという場合があるようです。

「３人寄れば文殊（もんじゅ）の知恵」という諺（ことわざ）では、１人より３人集まった方がよい考えが生まれるということになっています。しかし、集団の良い効果が期待できるのは、各人がそれぞれ自立し、自分の考えを自由に述べることができ、他者の意見をしっかり傾聴しながら議論を進める場合に限られるのではないでしょうか。そうした環境になければ、集団で議論したにもかかわらずその内容が浅いままで、自分たちに都合のよい意思決定が安易になされてしまうということがあるのです。こうしたケース、思い当たることはありませんか？　グループでの話し合いやクラスでの討論などを思い浮かべてみてください。自分は意見を言わない、面倒なので存在感のある人物の主張に賛成する、そんなことはありませんか？

アメリカの社会心理学者アーヴィング・ジャニス（Irving Janis）は、「集団思考／集団浅慮（せんりょ）」（グループシンク groupthink）という概念で、集団の心理的傾向をモデル化しました。（浅慮とは、考えの浅いこと、浅はかな考えなどを意味する言葉です。）　集団による意思決定プロセスとその結論が、集団の悪い面が出てしまい、個人で行う場合よりも、考えの浅いものになってしまうことについての概念です。

グループシンクの症状としては、次のような特徴があります。

【同調圧力】　みんなの決定に異論をとなえる雰囲気ではなく、圧力がかかり、大勢の意見や雰囲気に流され、同調してしまう心理がはたらく場合です。

【自己検閲（けんえつ）】　検閲とは、公権力などが表現内容などを調べあらためることですね。自己検閲とは、周囲の様子を見ながら自分で自分の意見を差し控えることです。話し合いの雰囲気が悪くならないように、波風を立てるような意見を言わないのは「自己検閲」が働いている状態です。

【マインド・ガード（mind-guards）の発生】
みんなの決定に異論をとなえるような反対者に圧力をかける存在が現れたりします。

【満場一致の幻影】　過半数にすぎない意見であっても、満場一致であると思い込む場合があります。集団の結束が強いと信じていると、意見のばらつきもないと錯覚してしまいます。少数派が無視されるような状況です。新しいアイデアや新たな発見は、はじめは皆少数派なのだと思いますが、その芽が摘まれかねません。

【自分たちに都合の悪い情報の遮断】　自分たちのほうが正しいと信じていると、それに反するような情報を積極的に無視するようにもなります。科学者でも同じ傾向があるようです。ネット時代の今は、自分の好みに合った、自分に都合のよいような情報しか届かない傾向もあるので注意が必要ですね。

【決定を合理的なものと思い込み、周囲からの助言を無視】
自分たちが完璧であると思い込んでしまうと、周囲や外部の存在を過小評価し、助言を無視するようになってしまいます。

【自分たちは道徳的であるという信念の広がり】
自分たちが行っていることは道徳的なことであり、社会にとって重要なことだという信念が広まると、自分たちの行為を振り返る機会が減ります。正義や大義、理念を振りかざしてのぶつかり合いは、なかなか大変です。

【ライバルの弱点を過大評価、能力を過小評価】
他の集団に対する認識がゆがんで、ライバルの力を冷静に判断できなくなると、まともな戦略が立てられなくなってしまいます。

ドラマの中にもこうした症状を呈する組織が登場することがありますが、ドラマに限らず、自分の行動の中にも、こうした傾向がないか振り返ってみることが必要かもしれません。コロナ禍の中で、授業において従来のようなアクティブラーニングを行いにくいところもあるのですが、授業や班別での話し合いなどの際にグループシンクになっていないかどうか、考えてみてほしいと思います。